

# 第一回教化学研究集会発表要旨

## 寺院運営論

— 明日の寺院 —

木村勝行

(岩手県本増寺住職)

発表にあたって寺院運営論をさがしたが見当たらず、キリスト教関係には教会運営の仕方についての研究がある。その点、われわれより遙かに進んでおり、われわれもなんとか寺院の運営について方向づけを作り出していきたいと思っている。今回は一例として自坊の運営を紹介し、この問題を考えていきたいと思う。

昭和四十九年寺が全焼した。再建を機に「宗教法本増寺規則」を作った。火災の責任を非常に厳しく追求され、悲痛この上ない状態であったが、檀信徒總會にて再

建という檀信徒の共通した結論となった。寺を解散するという強硬な意見もあったが、ぜひ再建との声に、住職を信任する、もう一度やれということで再建に至ったわけである。なんだかんだといつては檀家や信者が集まって、寺とは何か、それを皆にいくちで答えるとか、自分分は一体寺をどう考えているのか、など大いに論議し考へさせられ、今後の寺の在り方が本増寺規則になったのである。以下、推進している運営内容を紹介する。

いまは、まず再建と合わせて七百遠忌事業をやる。千葉県から大船渡に移転して五十年、一時間の焼失を十年の再建に全力こめて命がけてやった。工事中には九死に一生を得たこともあり、七百遠忌を機に再建と共に五十年祭を奉行できるようなってきた。再建工事の中で携わった人達に接して正月の大切さを知って元旦祭をはじめ、現在四千人の参詣者がある。実行委員会方式で運営し、

青年会議所・消防団など地域の組織に呼びかけ、委員会の一員になっている。その年の教育テーマをかかげて実践しているが成功していない。しかし寒修行などを実践して地域の教化をねらっている。資料づくりの教務を今後教化センターに発展させたいと考えている。

二月は星祭りをやるが、教育テーマは家内安全、どうしたら家づくりができるのかをねらいとして、家庭崩壊の問題・非行問題・老人の生き方・親の自覚など家庭に共通する安全という意識を自覚してもらおう、自覚させることが目的である。同時に陀羅尼をあげる人・祈禱する人・説教をする人などを教務の仕事とする。

三月は檀家方式で彼岸説教などをやる。檀家は寺のこととは何でも知りたいという心理にに応じて、寺とは何か、寺は信徒の教化育成をめざす、立正安国の精神を生活に生かすことなどを話すが、あまりピンとこない。宗派教育の不徹底さを感じる。ここでみられる信徒の意識は、年中行事に関わつての地域とのつながりということのみているようだ。これを地域教化ととらえる必要がある。大船渡市は津波と共に歩んできたが、そうした市(地域)

の歴史と寺とのつながりを知らしめることもある。

宗派教育になるが、立正安国の寺でなければいけない。立正安国の理念をもつて地域社会に参加する。檀信徒の家づくり・寺づくりに参加する、やはり正しいことは正しいと発言し、筋道を曲げてはだめだと痛切に感じる。人生相談や人事相談などを聞き、来る人に、それであるが家づくりができるならば、と助言や指針を与える。檀信徒はこの一言の助言がほしいのである。寺のバックボーンは立正安国という理念ではないかと思う。日蓮聖人が愛読された『貞観政要』を読むと、寺の運営はこうあらねばならないということを知ることができる。

寺は私だけでは守れない。檀信徒が寺を諫暁して護持していくしか策がないと思いい、寺院規則を作つて配布し、一切の経理も公開した。檀信徒総会で、一年間の行事の報告と決算、明年度の行事計画と予算、護持会の運営、墓地はどうあるべきか(墓地管理規定)、会館利用規定などを話し合い、活動して一昨年がすぎた。現在、寺は管理と教化をどういうふうに進めていくのかといったことと、教化センターとの問題をかかえている。われわれは、

ある時は管理者の顔をしたり、ある時は教化者の顔をしたりして檀家の誤解を受けたりもする。私は寺の管理・墓地管理は放棄したい。ところが、まかされて再建されたわけで、いまこの二つの問題で悩んでいるが、今後、寺の管理をどのようにやっていったらよいか、税務問題をも含めて、寺を守ることは大変だと思う。

四月は会員方式で唱題行を行なっている。遺文や聖人伝を研究資料に用意し、生き方・心得を教育テーマに、私達は日常生活の中で心得ちがいをしてはいないかといったことを話し合う。

五月は釈迦誕生祭、これは会員方式であるが、七割が非檀家の人、時には地域の団体を対象に、『法華経』やインド・スリランカ・ネパールの資料を使って生命の誕生や釈尊についてその教化するところを話す。

六月は団参研修旅行、七月は地域団体役員の研修会を開く。八月は七日盆、檀家方式にて墓地掃除、迎盆本盆送盆施餓鬼灯籠会を修し、灯籠会には千五百人ほどが参詣する。趣意書を配り、青年会・婦人会が店を出して活動の資金づくりをする。九月は子供盆、会員方式で二百

人ほど、彼岸には檀家方式で二百五十人ほど参加する。また九月はいままでの決算や事業報告を檀信徒達が行なう。本増寺は寺院会計・護持会計・住職会計の三本立てになっており、これらをまとめて法人会計ができる。

十月はお会式と檀信徒総会、説教など宗派教育などを行なうが、総会↓役員会↓具体的な話し合いを経て事業が推進される。文化祭や子供会もやり、少年の教化とされている。十一月は会員方式で一日参り、信行と人生を説いてお互い学び合う。十二月は集りが悪いが成道会をする。

以上、一年間の主な活動を報告したが、これらを推進している教務の充実を目指している。現在建築中である大部屋に教務室をつくって機能を強化する。教務室長は私、事務室長は総代会の総務会長がなる構成であるが、この教務室をなんとか教化センターにしたいと思っている。

このように再建をめざしてやってきた中で再三感じることは、地域教化というものを今後どのように体系的にとらえたらよいか、私がやっている「生涯教育」がこ

れていいのか、ということである。

もっとこれから学習しなければならない問題が多々あり、とくに注目されるのは、日蓮聖人がこうした運営についてどのように考えられていたのだろうかということである。例えば、身延山久遠寺の運営については、『身延山史』などではわからない。われわれの寺は、宗派教育からいえば、久遠寺の延長線上にあるが、いろいろな図書を読んでも、久遠寺の位置づけや評価が明確なものはない。仏教についての紹介書はたくさんあるが、寺院に関するものはない。寺のない仏教の紹介の本ばかりである。われわれは久遠寺の足場（土台）となつていているように思うのであるが。

日蓮聖人にとつて、寺とは、久遠寺とは何だったのだろうか。どうして十間四面の大坊を建立されたのであるのか。私はこういうことを問いかけたい、聖人にたずねたい。いまは遺文を通してこれを推定しなければならぬ。「教化学」の中で寺院を位置づけてもらいたくない。否、位置づける「教化学」が確立されなければならぬ。学問の上で寺院というものを認知していただきたい、ち

つとも認知されていないのであるから。文化庁から出された寺院建築関係のある書物の中に、文化庁は、日蓮宗は寺院の建築に対しては貧困である、とはつきり書いている。

寺というものをリアルにありのままに考えていかなければならない。そう考えることが、今日問われている課題であるのではないかと思う。寺の内部にいる者が寺を考えているわけであるが、寺の外部にいる者が寺とは何かと問うように、われわれは心を一新して問い直して考える必要に、いま迫られている。

## 未信徒教化の事例と

### その今日的意義

井本 学 雄  
(兵庫県妙典寺住職)

教師には、どうして、どのようにして布教というもの